
好きと言えない

MMR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きと言えない

【著者名】

N4344S

【作者略】

MMR

【あらすじ】

好きな人に、好きと言えるきっかけさえつかめないわたし。だけどそれはわたしがいけないだけじゃなくて、その好きな人の幼なじみにじやまさかれているような気がする。本当にそうなの?

あつ、もしかして今がチャンス、なのかも！

数少ないその時が、やつとやつてきた。

視線の先には、一人の男の子。

ここで焦っちゃいけない。あたりを見渡して、はやる気持ちを抑えながら状況をしつかりと整理しないと。

時間。学校の放課後。よし。

予定。確か今日は彼の部活は休部だったはず。よし。
彼までの距離。私の右斜め前方に向かって三つ分。うん、少し大きめの声を出せば通る。

そして肝心の……うん、本当に彼女には悪いけど、今はいない。
声一つかけるにも、ここまでやらなければいけないのに何の理由がある。なぜなら……

「よし。あの、コウくん……！」

わたしが小さく気合いを入れてまで行動を起こそうとしている。

「やほー！ ユウ、今日部活ないんでしょ？ 帰るよー！」

教室の中隅々までに跳ね返すほどよく通る女の子の声が、わたしの声を遮るように開け放たれる教室のドアと共に飛び込んできたりするのだから。

不安的中。なぜかわたしは、ユウくんに一歩踏み出すためにがんばらうとするが、何かしらの……特に彼女の止めが入ってきてしまう。

偶然と言えば簡単だけど、本当にそれだけなのかな？

「ありや、力もちょうどよかつた！ 一緒に帰ろー！」

そんなわたしの考えをよそに、彼女の視線もまた、彼を先に捕らえた後にわたしにも向けてくる。

「う、うん……そうしようか」

せつかく声かけようとした気合にや勇氣もどこかへ飛んでしまって、内心では泣きたいくらい落ち込んでいるわたしをよそに、彼女は明るく振る舞つていて。

それに対しても、ちょっとと引いて答えてしまつわたし。
彼女だってわたしがこんな気持ちでいることはわからないかもしれないけど。

「おいカスミ、あんまり大きな声出して呼ぶなよな。目立つだろ」「えへへ、『ごめん』ごめん。でも田立つて何がイヤなのかな？　あ、もしかして『・イ・ビ・ト！』と思われるからだつたりして。あはは！」

「ふざけんな、誰がおまえと！　ただの幼なじみが勘違いすんな！」「はいはい。どうせ私はただの幼なじみですよーだ。もう大声で声かけたりしないんだから。ねー、カホ？」

「え？　あ、うん……」

普段から、ひとたび幼なじみの一人の話が始まつてしまつとなかなかわたしはその話に入れないでいた。なのに、突然話を振られて驚く。

でも、驚いたのはそこだけじゃなくて。
まるで、わたしがさつきコウくんにしようとしていたことを見ていたようなセリフだよね、今の。

そういうえばカスミ、胸に手を置いて息を整えているように見える。
まさか、やっぱりわたしが声をかけようとしたのをわざと止めてる？

「ん？　どしたの、カホ」

「ううん、なんでもない！　二人とも、もうケンカなんてやめて、わっ、帰ろ？」

そんなわけない。カスミを疑うなんて、いくら自分がうまくいかないからつてしちゃいけないことだ。

そんなわけで、わたしは、ユウくんにつままでたつても。

好きと、言えない。

「それにしてもユウはあの時だけはカツ『良かつたよね』
「またその話か。つーか『だけ』は余計だ」

結局三人でたどる学校の帰り道。

相変わらず一人の距離は幼なじみだけあって近い。もう少しで腕なんか簡単に組んでしまえそうなほどに、時折肩がぶつかったりしているのが、見たくないのに見えてしまう。そのたびにわたしの気持ちは揺れまくっている。

わたしだって、ユウくんと話したいのに。

ただ、今日の話題はまだわたしにも入り込む余地があつたのは救いだつた。

「でも、本当にあの時は助かつたなあ。ありがとう、ユウくん」「力も今までやめてくれよ」

それは、わたしとユウくんとの出会いの話だつた。

カスミと久しぶりに大きな街まで買い物に出かけようという話になつて、かなり頑張つてオシャレをして、待ち合わせ場所で待つていた時のこと。

その気合いが、少しばかり肌の露出を伴つていたのは今になつて思うといけなかつたのかもしれない。

変な人に絡まれてしまつて、そこに助けを入れてくれたのがユウくんだつたのだ。

それも、彼氏のフリをして。

今思うとすごくベタな話なんだけど、それでも助かつたのは事実で、すごく頼りになつて。

話を聞くとカスミが男の意見も参考にしようとわたしに内緒でユウくんを連れてきたらしく、その後もわたしのことを気遣つてくれて。

それは、コウくんを好きになる理由に十分だった。

「コウも力亦のカレシ気分、まんざらじやなかつたでしょー」

「バカ、突然何を言いやがる」

「照れちゃつてえ。でも力亦可愛いからね、そう簡単には力亦もなびかないよ?」

わたしの方がまんざらじやないわけで。せつかくのコウくんの反応を知るチャンスだとうのに、その動搖を隠すのに精一杯で、顔が熱くなつてくるのを止めることしかできない。

どうしてこう、最近のカスミはわたしが反応しない話ばかり振つてくるんだね?」

それに。

どうしてそこで話が止まっちゃうの?

カスミも話を先に進めればいいのに、こんな時に限つて何も言わない。

氣のせいか、カスミはわたしの方を向いてじっと言葉を待つているように見える。

え、わたし何か言わないとダメなの?

えつと、否定するのは誤解招きそuddash;だし、肯定するのは今じやない気が……いやでも今こそ好きつて言えるチャンスなのかも? でもあまりに突然だし変に思われないかな。

頭の中でぐるぐる回る選択肢に迷つて、答えたにたどり着こうとしているが、カスミがまるでわたしに聞かせるように大きなため息をついた。

「はあ……どうやらコウ、脹なしだね。ざんねんだったねー」

「ええつー?」

まったく逆の解釈をされたことに驚きすぎて、コウくんより先にわたしの声が出てしまった。

下手すると気持ちがバレてしまつ反応をしてしまつた自分に気づいたわたしは、すぐに両手で口をふさぐ。けど、カスミは気づいて

しまったようで。

「あれあれ？ それともカホこそ、ユウのことまんざりじやないのかな？」

「しかもなんでカスミが追い打ちをかけてくるの？」

どうしよう、このまま追いかけていくと、とても一人に見せられない顔になりそうで怖い。どうしよう、とわたしが状況を開できないでいると。

「おいカスミ、ちょっと待て。カホ困ってるだろ。それに……ほら、わかつてるだろ」

「はいはい。わかつてますよー」

また、ユウくんが助けてくれた。それは嬉しいんだけど、その反面、何か引っかかるものがある。今の感じ、一人だけの秘密みたいなものを持っているようで。

やつぱりこれが幼なじみの距離感なのかな。今もなんだか一人でわたしに聞こえないように何か話しているみたいだし。
なんだか、寂しい。

「そういえばさあ」

自分の気持ちが下がつたことを実感して、顔の熱さもおさまりかけてきた頃、カスミが話出した。

「今のお話で思つたんだけど、最近あんまり買い物行つてないよね？
そろそろどこか見に行かない？」

待ち合わせの場所、駅前の噴水広場にわたしは一人立つて待っていた。

なんとなく落ち着かなくて、かかとを上げ下ろして、早く来ないかなと遠くを見つめてみたり。

周囲も気にしながら、腕時計をちらりと確認。

午前九時ちょっと過ぎ。

「早く着きすぎちゃったかな」

ちょっとと過ぎなんて表現をすると、まるで自分が遅刻をしてしまつているような気がするから不思議。

待ち合わせ時間は、九時三十分。

隣の街にあるデパートまでは、電車で十五分ほどかかる。どうせだったら十時に開店した直後のすいていのうちに行つた方がいいよね、とカスミが提案してこの時間になった。

「わたしも懲りないなあ……」

両手を斜め下に下ろして、自分の身なりを確かめてみる。

とりあえず、ふとももはバツチリと出でてしまつていた。他にもいろいろ危なくて、自分で笑えてしまつ。

いつも以上におしゃれに気をつかつた結果がこれだ。以前もユウくんにこういう格好をしたせいで助けられたといつのに、これじゃ

「力ホ、おはよ！　ていつかさ、力ホ危機感なさすぎ……いつか襲われるよ？」

「こう言われてしまつても仕方ない。

それでも、気合いを入れなくちゃと思つた理由は、もちろん……

「まあ、今回も参考のためつてことでユウがいるから大丈夫だとか思つてるかもしね……ユウだつていつも助けられるとは限らないんだよ？」

今回はわたしも最初から、ユウくんが来ることを知つていたから。わたしは改めてユウくんを目の前にして声が裏返りそうになりながらも、おはよう、とあまり大きく声に出せなかつたけれど挨拶の言葉を振り絞る。

「おはよう、力ホ。ところでカスミがそう言つのはもっともだけどな、おまえはもうちょっとその無頓着さをなんとかしてくれ」

「うわすごく失礼な！　ボーイッシュって言葉知らないの？　無頓着なのはユウの方なんじゃないの？　それとも私に力ホみたいな女子っぽい格好をしてほしいうの？　ヘンタイなの？」

「カスミ……なんだかわたし複雑な気分なんだけど……」

会つなり突然わたしが巻き込まれたわけだけど、まつたく褒められているような気がしない。というかちょっとバカにされてる気が？

「あつ、違うってカホ！　コウツて表向き紳士っぽくふるまつてるけど、裏ではけつこうヒツチなことばつか考へてるから、幼なじみに対してエロい視線で見ていることに気持ち悪さを感じただけ」

「自分が言い訳するためになんてこと口走ってるんだおまえは！」

「人を犠牲にするんじゃねーよ！　そりや……カホの格好を見てかわいいとは思つたけど、カスミのそういう服着るところ見せられるのはこっちからお断りだね」

えつ、なんかまたカスミと相変わらずの口げんかが始まつたなあと思つてたら、もしかして今わたしの格好がかわいいって言つた？　そう言つてくれただけでも、思い切つてきた甲斐があつた。見せている肌以上に、心がはだかにされてしまいそうな感じがむずがゆいけど。

ふいうちなコウくんの褒め言葉に、少し心を落ち着かせる時間が欲しい。幸い、といつていいのかわからないけど、今の流れだとカスミがさらにヒートアップして、しばらくコウくんとの言い合いが止まらなくなるどころだ。ここはしづらくなめないでおこへ。

と、思つたんだけど。

「ふーんだ、いい子ぶっちゃつて」

意外にも、カスミは一步引いて。

それどころか、なんだか嬉しそうにコウくんのことをひじで突ついている。

やつぱりこの一人、よくわからない。ここのこと何度も感じる、二人の関係への疑問。

そういうえば、この待ち合わせにも一人で来ていたし……もちろん幼なじみだから、で済ませれば簡単なんだけど。ちくりと、胸が痛んだ。

何度も喜んだり悲しんだり。わたって単純だなと思つ。

ついさっきもコウくんとカスミはどんな関係なんだらつて勝手に落ち込んでいたわけだけ。

買い物をするのは、やっぱり楽しい。もちろんカスミと一緒に思う存分できているからと/orのもあるけど、隣にコウくんがいると、いうのが嬉しい。

コウくんが女の子の買い物に付き合つて疲れないかな、と感じたりもしたけど、優しいからなのかそれともカスミにさんざん付き合つて慣れているからなのか、そんな表情を見せることもなくて。もちろん、それはそれでやっぱり複雑だけど、でもおかげでコウくんが思つている服装の好みもいっぱい収集できだし。えへへ。カスミの悪ノリが始まつたのは大変だつたけど……

突然水着を見に行こう！なんて言われて、コウくんの前でお披露目したり。さすがに恥ずかしかつたけど、照れてるコウくんの顔を見るのはなかなかレアで、文字通り体を張つた甲斐があつたように思う。

わたしたちの隣でも同じように男の子一人に女の子一人で試着しているのを見て、ちょっと対抗心を燃やしてしまつたかもしれない。さすがに女の子一人でじやれあつていてるのを見たときには、わたしにはできないなつて思つたけど。というより、それを見たわたしがこんなことされたら困るだろうな、とその相手の男の人同情してしまつた。きっと同じことをやつたらコウくんも困つてしまつだろうからやめた。どちらにしても恥ずかしいからやらないけど。おにいちゃん、とか呼んでいたから、きっと家族だからこそできることなんだと言い聞かせてみる。

それにしても片方の女の子は胸が大きかつたな、うらやましいなと思つてしまつたのは別の話。

似たようなもので、カスミもコウくんに対しても「どう、わたしのカラダに見惚れちゃつた？」とか容赦なくコウくんを追い詰めていた。「もつと魅力的なのはカホだけどねー」なんてフォローをも

らつたけれど……

こんな時にふと出でしまう、わたしの悪い部分。

本当は、少しでもいいからユウくんと一人だけで話してみたい、なんて思つてしまつ。

思えばユウくんといる時は必ずカスミが中に入つていて、今までユウくんと二人でいられるようなことがなかつた。

でも、それは仕方のないこと。だつて幼なじみで、もともと仲の良い一人なんだから。むしろ割つて入つたのはわたしの方なんだ。それに明るくて行動力のあるユウくんとはかけ離れたわたし。つりあう相手じゃないつてのもわかつてゐる。

あーあ、せつかく今、ちょっと休憩にと水面が宝石のように輝いてきれいな海辺の公園でひとやすみしてリフレッシュしようと/or>いるのに、こんなこと考え込んでしまうなんて。

ユウくんにも、カスミにも悪い気がした。

「どうしたの、カホ。なんか元気ないよね？」

「え、そうかな」

そんな考えを隠さうにも、そこまでの余裕はなかつたし、だから少なくともカスミにわたしの様子を悟られるのは仕方ないつて思つてた。だからわたしはあまり動搖することなく答えられていた。「恋の悩みだつたりして！」

カスミは冗談っぽく言つたつもりなんだろうけど。

「うん、正解なんだよね。そう言えるはずもなく。

「そんなことないよ。ちょっと疲れちゃつたなーって思つて」

結局今日も、ユウくんに話しかけようとしてもできなかつたし。

そう、今日こそチャンスだと思つていたのに、やつぱり「ことじ」とくカスミがまるでわたしを止めるように入つてくるのだ。

それに対する疲れも、確かにあつた。だから、ウソはついていない。ただの嫉妬で醜いことだつて分かつてゐけど、そうして正当化してなんとか自分を落ち着けていた。なのに。

「もしかして、私が原因かな？」

まさかのまるでわたしの心を読んでいたかのようなカスミの発言が降りかかってきた。構えるまでの準備をしている間に、すかさず懐へ飛び込まれてきたような感覚だった。わたしは違う、と否定しようにも言葉が出てこなかつた。

「ふーん……ねえ、私おじやまかな？」

わたし自身が動搖しているのを自覚しているのだ。察しの良いカスミにはもう完全にわたしの気持ちなど手に取るよりにわかるのだろう。

「カスミ、いい加減に力水も困つて……」

「ユウ、あんたもあんたよ。しつかりしなさいよね」

前にもあつたよつな、ユウくんの止めは途中でカスミにさえぎられる。

「え、なんでここでユウくんが怒られてるの？」

理解ができないこの状況に、わたしは一人のやりとりをじぱりく黙つてみていくことしかできなかつた。

「な、何がだよ。第一、これ以上力水にそんなこと言つてたら約束が」

「あのね、もう約束守るのも限界なの。これ以上隠したままでいてどうするつもりなの？」

「いや、それはちゃんとタイミングが良い時に言つつもりでいるし」「だ・か・ら！ そのタイミングは今までこいつでもあつたでしょ？」いい加減さつさと言わないと後悔するよ？」

「く……確かにそうだけじゃ」

今度こそ止められない二人の口げんかが始まつたわけだけど、その会話からわかつたことが一つ。

一人は、わたしに何かを隠してゐる。そして、その何かをわたしに言おうとしている。

すると、わたしの中で一つの結論が出た。

そつか、そういうことなんだ……

「あ、あのね！」

一人の中に、わたしが割り込む。それは勇気のいることだつたけど、もっと勇気のいることを今からわたしはしようとしている。

あらかじめ一人の会話をしている間に覚悟を決めておいたわたしは、振り向いて何か言われてしまう前に、できる限りの声を振り絞つて。

「ごめんね！　わたし、気づかなくて。二人が……もうそんな関係だつてこと、全然わからなくて。『気をつかわせちゃつたんだよね。じゃまだつたのは本当はわたしだつたんだよね。だ、だから……』

二人の顔がまともに見られない。これ以上続ける言葉も見つからない。どうしたらいいのかわからない。

だけど、この場所にいたらだめだ。それだけはかろうじて考えられた。

「わ、わたしもう帰るね！」

一人に顔を向けることなどできず、わたしは一刻も早くここを立ち去りたくて、来た道を戻るように走り出す。

「あ、ちょ、ちょっと待つてカホ！　ちょっと、あんた追いかけなさいよ！　取り返しのつかないことになるわよ！」

後ろでカスミの声が聞こえる。

なんで？　なんでユウくんを追いかけさせるの？

ユウくんとカスミが付き合っていること、そんなにわたしに知らせたいの？

カスミも意地悪だ。直接言つてはいなけれど、わたしの気持ちなんてもうわかつてはるはずなのに。

これからは、カスミとも距離を置くことになるんだろうな。そんな、先の心配をしたのがいけなかつたんだろうか。

わたしの手を振りほどくささいな抵抗などとてもかなわないような大きな力で、誰かに引き戻された。

それが誰かなんて、顔を見なくたつてわかる。

あこがれだつたはじめて手を取られるという経験がこんな辛い時になるだなんて、神様もとことんわたしに味方してくれない。

「は、はなして……」

力で勝てないことがわかつてゐるわたしは、懇願することしかできぬ。

「ごめん、悪かった」

だけど力は弱まるどころか痛いくらいにつかまれたままだ。

「謝らないでいいよ……気づかなかつたわたしが悪いだけだもん」

「違う、勘違いさせて悪かった」

「うん、わたしが勘違いしてしまつたから……」

「だからそうじやなくて……いや、カスミの言つとおりだ。タイミングはいくらでもあつたのに勇気が足りなかつた。だから力が傷つけてしまつたんだよな、ごめん」

言つてゐる意味が、よくわからない。いつたい何の話をしているの？

わたしはコウくんに何を謝られてゐるの？

でも、その答えは次のコウくんの言葉で明らかになる。

「力が、好きなんだ」

「え？」

それは、今の流れからして全く予測していなかつた言葉だつた。今のわたしはどんな顔をしているだろ？ 眼から涙は溢れてくるし、周囲もきにせず走つたおかげで服は乱れているだろ？ し、とても見せられる顔じゃない。けど……

あまりの不意打ちな言葉に、コウくんに目を向けてしまつた。

「カスミに頼んだんだ。自分から気持ちを伝えたいから、力の気持ちがわかるようなことがあつたら止めてくれつて。もしかしたらそれが誤解を生んだのかもしれない。本当にごめん」

コウくんの言葉で、わたしの頭の中に今までの出来事がよぎる。

教室でコウくんをわたしが誘おうとした時にカスミが息を切らしながら入ってきた時も。

帰り道、二人で秘密を持つてゐるように見えた時も。

買い物の待ち合わせでコウくんがわたしを褒めるよつな」ことを言つてくれたタイミングでカスミが口げんかを止めた時も。そして、つこせりあいの出来事も。

わたしが今まで好きと言えるチャンスをえつかめなかつたのは。

「自分がはつきりしなかつたせい。今まで勘違こさせで『めん』すべて、このためだつたんだ。

そうは言つても、すぐにコウくんの告白を受け入れられなかつた。あまりにもびんぐん返しすぎでついていけなかつた。だから、否定の言葉さえ出てしまつ。

「わたし、顔もそんなよくないし」

「そんなことない。かわいい」

「うう……」

「だつて、ムネも小さいし」

「そんなの今関係ないし、気にしてない」

「あう……」

「わたしじゃ、つりあわないし」

「じつちが好きなんだから、そんなこと気にするな」

「はう……」

こんな時に限つて、わたしが言えない言葉を彼は簡単に言つてくれてしまつ。

強引で、優しいコウくん。好きになりすぎて、困るくらいになる。彼の言葉に、わたしあだんだん言葉を返せなくなる。

「嫌なのか?」

「嫌じゃない！ だつて、わたしも」

迫つてくる彼の顔、そして唇に注がれるその優しいぬくもりに、わたしはついにそれ以上の言葉を声に出せなくなつて。
ほらやつぱり。わたしは、あなたにかかると……
好きと、言えない。

「おふたりさん？ 私のこと忘れてないかな？」

その言葉に、わたしだけでなくコウくんも気づいたようで、わたしが離れた以上の距離がコウくんとの間にできる。

「えー？ 別にかまわず続けてくれてもいいのに」
やっぱり、カスミは意地悪。

違つた意味で、カスミとは距離を置きそつかもしれなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344s/>

好きと言えない

2011年4月13日01時10分発行